

ハンドボール競技における個人戦術に関する研究
～フローターM. Aの運動観察を中心に～

市村紀子（中学校課程・保健体育専攻）

<序論> 研究動機・目的、研究方法

本研究では、著者がこれまで関わってきたハンドボール競技においてセット攻撃にみられる個人戦術に着目し、運動学的立場に基づく運動の質という観点から典型例を観察していく。その際、村上麻美選手（筑波大時代、3、4年と春秋関東リーグ・東日本・全日本インカレ四冠制覇の成績。以下M. Aと略す。）を中心に動きの経過を追いどのように攻撃の成功に関係しているかに迫ることを狙いとした。

実際の観察は、1997～1999年までの東日本・全日本インカレにおける、筑波大女子ハンドボール部の試合の中から、典型的なプレーをいくつか選んで行うものとする。

<本論> 第1章 ハンドボール競技の特性

ゲームを分析するに先立って、ハンドボールの特性を整理しておかねばならない。ゲームの特性としては、2チームのメンバーがボールを奪い合いながら相手チームのゴールにボールを投げ入れ、味方チームのゴールを相手の攻撃から防御することがいえる。技術の特性については、ボールを所有している場合と所有していない場合の体系、ボール取得、パス技術、シュート技術、ドリブル技術、フェイント技術の体系としてまとめることができる。また、個人戦術とは、ゲームの中でどのようなプレーを選択していくのかという技術選択能力のことである。そのため、オフェンスにおいてディフェンスと1対1で対峙している状況を打開するために注目されるフェイント及びシュートの技術についてとらえることができる。

第2章 ゲームの運動観察とは

本研究では、ゲームを観察する際にビデオを用いて観察を行った。そのときにどの視点でものをみるかを定めるため、「球技論的立場からの観察」さらに「モルフォロギ的観察」を基礎にした運動学・球技論の知識を用いた。また、マイネルの Kategorii の利用は、印象分析において重要な役

目を果たした。ハンドボールのような運動を観察する際には主観的な見かたに終始してしまう。いわゆる、客観的把握というものが困難になるため目で見ただけでなく運動に“共感”しながら印象分析を行うことが有効になるのである。このマイネルの8つのカテゴリー（運動の局面構造、運動のリズム、運動の流動、運動の弾性、運動の先取り、運動の正確さ、運動の調和、運動の伝導）の中で、とりわけ運動の局面構造、運動のリズム、運動の先取りという概念を重要視して取り扱った。

第3章 観察の実際

本章では、フローターM. Aのシュートを撃つことに成功したプレーを6つに分類し、さらにそれぞれの運動経過の観察を質的側面から行った。観察の枠組みは、位置取りの走、パスを受けてからの動き、シュートに大別した。

観察の結果、典型的なプレー（ストライドフェイントからのシュートを用いて）では、自分の動きの「先取り」、相手ディフェンスの動きの「先取り」が正確に行なわれていることが明らかとなった。そして、フェイントやステップに運動リズムの変化や、先取り動作による運動局面の融合が顕著に認められ、運動学的に調和のとれた無駄の少ない、優れた運動であることが確認された。

<結論>

オフェンス場面において、得点に結びつくプレーには巧みなフェイントや独特なリズム変化が際立っていると見える。さらに、その運動経過には優れた運動の諸徴表が浮き彫りとなって現れていることも明らかとなり、一般化できるものであった。そして、今後の展望としては個人の動きの観察から集団の動きへの観察へつなげていくことにある。

ゲーム観察は、量的な結果を見ていく傾向が強いのだが、運動の質的分析の意義、必要性は重要なものとなってくるだろう。しかしながら、運動を質的に分析していく印象分析には優れた観察力が必要であり、その訓練の仕方を検討されなければならない。今後は、そのような問題を解決すべく、より簡潔で有用となる観察をしていかなければならない。

—主要参考文献省略—